『教育の窓』１９６２年６月（東京書籍）

# 社会科学習を充実する道

国立教育研究所　**矢　口　　新**

社会科は、社会を見ることを学ぶ教科であるから、社会を見るということをしないでは成り立たない。地理的とか歴史的とか、あるいは社会経済の分野といったように、分野がわかれていても、その根本にある、社会を見るということだけは、どの分野でも同様である。ところが、社会科の教科書を見ると、そういうように社会を見ることができるようになっていない部分が多い。

たとえば、歴史の部分などはその最もよい例である。教科書の一節をとってみる。「きぞくがさかえた時代」（六年上　二の（三））のはじめのところに、「奈良(なら)時代のなかばすぎになると、きぞくはじぶんの勢力をのばそうとして争うようになりました。仏教がだいじにされたので、寺院の勢力も大きくなり、そうのなかには、政治にかかわるものもでてきました。そこで、桓武天皇(かんむてんのう)は、都を平安京（いまの京都）に移しました。」（５５ページ）というように書いてあるが、このように書かれたところを読んだだけでは、子供はこれを信ずる以外に手はない。教科書にうそは書いていないと思うから、これを信ずることになるのだろうが、果たしてそれが、時代がわかったことになるだろうか。「きぞくはじぶんの勢力をのばそうとして争うようになりました。」というのは、事実としてはどういうことであろうか。今も昔もかわりない人々の政治における争いのことだということぐらいはわかるかもしれないが、そういうことを読みとるだけなら、なにもこの時代のことを勉強したことにはならない。また「仏教がだいじにされた」とあるが、それがどういうことだか、仏教とは何か、当時の人々の心にどういう影響を与えていたものであろうか、だいじにされたとはどういうことなのか、子供が日常に聞く言葉としての、ものをだいじにするということとはちがうのであろう。そういうことがわかるであろうか。その結果、寺院の勢力がのびたといったことが、どこまでわかるか、そこには複雑な社会の人々の営みがふくまれているのであろうが、それがただ「だいじにされたので、寺院の勢力がのびた」といったことでよいのか。「そこで、……都を京都に移した」といったことは、都を移すことが、前のこととどういう関係の事がらにあるのか、そこにあるさまざまな事情や為政者の考え方はどうして理解されるのか。

社会科は、社会のことを理解させるものと考えられているが、ほん

とうは社会のことを見せるというように考え直さなければいけないのではないだろうか。右に述べた事がらは、歴史の事例であるが、歴史的分野でも、地理的分野でも、さらに社会の分野でも、同じことである。今のところ、話を聞いたり、本を読んだりしたのでは、社会を見ていることにならない。つまり、人の話とか、教科書に書いてあることとかは、ある人が社会を見て、その結果その人が判断をしたこと、つまり人の判断の結果である。それをそのまま読んだり、聞いたりするのでは、そのものを信ずる以外に手はない。それは結局、記憶という学習をすることになるであろう。さきに述べた教科書の内容を読むというような学習を考える考え方では、子供に、社会を学習させることにはならないのであって、社会の学習にたいせつなことは、教科書の内容にあるような一つの命題を子供が自分で立てるということにならなくてはならぬ。それは、子供が自分の目で社会を見るということである。それを自分で整理して、そこから一つの判断を定立させるのである。そこが社会の学習である。

前に述べた例でいえば、きぞくが勢力をのばそうとしたということは、どういう事実をさすのか、互いに争ったというのは、どのことをいうのか、仏教がだいじにされたとは、何をいうのか、僧侶がだいじにされたことなのか、だいじとは、どういうことなのか、その中に政治にかかわるものが出たというのは、だれが何をしたことなのか、かかわらないというのは、どういうことで、かかわる人々はだれなのか、当時は、だれがどのように政治にかかわっていたのか等々、さまざまな事実が示されて、その事実を整理してみなくてはならぬ。そうすると、教科書の中の言葉の内実がはいって、はじめて時代のすがたもわかるであろう。それでなければ、教科書の抽象的な言葉では何もわかりはしない。そういうものでは時代がわかるということにならないであろう。

社会を見るというのは、社会の事実をならべて、整理をして、自分の頭で、判断をしてわかるのである。そういうことをやらせないで話を聞かせたり、本を読ませたりしていては、社会を見ることができるようにならない。

今の教科書は、ほんとうに子供に学習させるようにはできていないから、その点で教師はじゅうぶんに準備をしなくてはならぬ。どういう資料を子供に与えたら、教科書に書いてあるような結論ができるかというように考えて、資料を準備することがたいせつである。つぎにその資料をどんな順序で整理したらよいかを考えて、子供に学習活動をさせる順序を考えるのである。この点が、忘れられると、社会科は子供と教師のむだ話的時間に終わってしまうであろう。

もう一つたいせつなことは、社会科の授業は、むだ話が多すぎることである。こういうと、たいへん失礼にあたるが、資料のないところで、子供と教師の問答をしている姿をみると、子供は、いったい何をしているだろうと感ずることがある。ところが、それが一クラス五十人の子供を相手にしているということを考えて、さらによくみると、大部分の子供がぼんやりしていることである。教師と子供の問答は、ごく一部の子供との間に行なわれている。大部分の子供は、ぼんやりそれを聞いている。一部の子供は活発に活動しているが、それでも、教師の話が全部通じているのではない。所々、大きなあながあいているのである。その他おおぜいの子供は、一部の子供と教師の話をよそからながめている。ながめているわけではないが、そうさせられている。つまりついていけないのである。所々あながあくどころか、そこら中、あなだらけである。そういうのを全体としてみると、むだ話と

いうのである。

ラーニング・バイ・ドゥーイングということがあるが、子供は、ドゥーイングをしていないのである。何もしないわけではないが、考えるべきところを考え、材料を見るべきところを見るというようにやっていないのである。それではラーニングもしないことになっている。ラーニング・バイ・ドゥーイングというのは、「なすことによって学ぶ」と訳されて、いわゆる経験学習の原理として、一時もてはやされたが、最近、次第に忘れられている。しかし、これを、人間はなしたことに応じて、学習を成立させるのだというように、もっと本質的に考えてみたらどうであろう。材料を見て、論理的に整理するというドゥーイングをしないでは、そういう能力が身につかないことは言うまでもあるまい。しかも、それを子供一人一人がしなければ、それぞれの子供に学習は成立しないであろう。ところが、五十人が一学級をなしていて、それと教師の間でいろいろ話し合いが行なわれているという授業では、極端に言えば、生徒一人一人は五十分の一ずつのドゥーイングをすれば、全体で一つのドゥーイングをしていることになる。それでも学級としては、一つの授業をしていることになる。

実際の授業はそうではなく、五十人の中の十人くらいが、教師の話すことを熱心に聞き、その問いに対して熱心に答えている。それらの子供は時々あなをあけるが、まあ、教師の言うとおりに、それぞれドゥーイングをして、授業を進めている。考えろといえば考えているし、この資料を見ろといえば見ている。しかし、五十人全体をみると、すべての子供はそうはしていない。資料を見ろといわれても、どこをどう見てよいのかわからない。考えろといわれても、どう考えるのか、教師に質問されても、よくわからない。そのうちに他の子供が、それに答えて授業はどんどん進んでいってしまう。こうして、何もドゥーイングをしないうちに過ぎてしまう。ただぼんやりすわって、あれよあれよと、人のすることを見ているというドゥーイングだけをしていることになる。

私はここで、ドゥーイングという言葉を使ったが、これは、一時はやった、いわゆる経験ということをさすのではない。見るとか、からだでやるとかといったことだけをドゥーイングと考えがちだが、そうでなくて、資料を分析するのも、理論的に、ものを考えるのも、みなドゥーイングである。そのことをしなければ、社会の学習をしたことにならないということをドゥーイングと考える。そういうことを一人一人の子供に、きちんとやらせなくてはだめであろう。そのドゥーイングを一人一人にやらせる方法をどう考えるかということは、これからの社会学習の授業では、じゅうぶんに研究されなければならないであろう。

以上、二つのことを述べたが、実は一つのことであって、社会のことを見る、見るには材料がいる、それを準備して、子供に見せる、見たものを整理して、そこから判断を成立させ、社会はこれこれであると命題をたてる、それを一人一人の子供がきちんとやらなくてはならぬ、そういうことをやるのが社会の学習である。

子供がそういうドゥーイングをするようにするには、今までのように、大ざっぱな指導計画ではだめであろう。指導計画は、子供の行動のしかたを計画していない。教師の行動の計画でなく、子供の行動のプログラムである。それを精細につくって、一人一人の子供に、必要なことは全部やらせるようにすること、そういった学習の方式がくふうされるべきであろう。最近言われている、プログラム学習については、社会科においても考えてみてよいであろう。